

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：伊藤 綾

伊藤綾氏の課程博士学位請求論文『ボードレール 十九世紀の原史』は、その副題「ボードレールから見たベンヤミン」がはっきりと示しているように、二十世紀前半のドイツのもっとも重要な思想家の一人、ヴァルター・ベンヤミンのボードレール論に焦点を当てたものであり、その意義や問題点をそれがいかなる歴史的文脈のうえに成り立っているかを明らかにすることを通じて解明することを課題としている。伊藤氏の論文はこの課題を、一方で、それが十九世紀後半から二十世紀前半のフランスとドイツにおけるボードレールの受容史(詩人ボードレール像の変遷)とどのような関係をもち、他方で、ボードレール自身の思想(とくにその「現代性」の概念が明示的に提起される美術批評)や散文詩を中心とする詩的営為と比較した時にどのような交錯を見せるのかを洗い出すことで果たそうとする。

本論文は序論と結論をのぞいて五つの章からなっている。まず第一章は、「詩人ボードレールという神話」と題され、ボードレールの没後からベンヤミンにいたるまでのボードレール論の系譜がその主要な傾向を確認しつつ辿られ、その中におけるベンヤミンの位置が特定される。続いて第二章「原史と起源」では、今度はベンヤミン自身におけるボードレールへの関心あり方が前期と後期という二つの時期に分けて論じられ、前期の言語論的関心から、後期においては歴史の問題に焦点があてられるようになること、そこで出てくるのがパッサージュ論の要の一つである「十九世紀の原史」という概念であることが確認される。続く二つの章「現代性の二つの位相 — 「折衷主義」と「哲学的芸術」の批判」と「ボードレールの歴史観 — ジョゼッペ・フェッラーリの宿命論からの影響」では、視点をボードレールに再び転じ、第2章で扱われた「十九世紀の原史」というベンヤミンの一種の歴史認識がボードレール自身のテキストから抽出することが可能な歴史観、時代認識とどのような関係を結ぶことができるのかを検討される。最終章「詩的散文の言語態 — 後期ボードレールの相貌」では、ボードレール晩年の重要な試みである散文詩の制作が、先行する章で扱われたボードレールの時代認識と、そしてまたベンヤミンが「十九世紀の原史」という構想の中心にボードレールを置いたことの意味とどう関わるのかが考察される。後期散文詩とは、ベンヤミンがボードレールに見た「歴史的に条件づけられた空虚な場」としての詩人という像を、それが必然的に孕む「詩人の孤独」とともに読者に強く意識させる言語空間の構築であるというのがその結論である。

本論文の学術上の貢献についてであるが、ベンヤミンがボードレールの言うモデルニテを、もっぱら（ボードレールにおいてはそうであったはずの）現代芸術の理論として解するのではなく、近代（モデルネ）全体についての理論（言い換えれば、一種の歴史認識）として読もうとしたということが、ボードレール研究の側から見た時のベンヤミンのボードレール論の難点となってきた。伊藤氏はそうした批判の正しさを認めつつも、ボードレールの内部にベンヤミン的な読み込みを許すような一つの時代意識、歴史認識があったことを示そうとし、それにある程度まで成功している。またこの問題を詩人（文学者）の社会的機能の変容という問題と結びつけて論じたことも本論文の重要な貢献である。ユゴーに代表されるような時代の先導者、予言者としての詩人像はボードレールの時代にはすでに過去のものとなりつつあったが、詩人の言説の（より広くは文学の言説の）直接的な社会的実効性の喪失が、逆説的にも詩人や文学に対する別の形での社会的政治的機能の割り当てにつながって行くという、二十世紀においてますますはっきりしてくる変容が、ベンヤミンのボードレール論のいわば前提条件ともなっていることが示された。

審査委員からは、論文全体の鍵概念となるはずの、ベンヤミンの「原史」という概念が何を意味するのかということの検討が不十分であること、最終章のボードレールの散文詩の意図をめぐる分析が論文全体の論旨と必ずしもうまく接合していないこと、また典拠となるボードレールのテキストの解釈にいくつか誤りが見られることなどが指摘されたが、これらの点は本論文の学術的意義を大きく損なうものではない。また、伊藤氏が本論文で試みたような研究は、従来の仏文学、独文学といった領域区分を超えたものであり、同時に、文学、歴史哲学、政治思想史などの領域を架橋することを目指すものでもあって、その野心的な試みは、そのために払われた多大な努力を考えるならば、それ自体として高く評価されるべきものである。

以上のような観点から、本審査委員会は、伊藤綾氏を博士（学術）の学位を授与されるにふさわしいものと認定する。